



三 松 禅 寺
平成26年1月
第 61 号

檀家の皆様
ご寄稿を
お願いします

生 知



皆川大真

平成二十六年・甲午
(きのえうま) 仏紀二千
五百八十年 本年も御道
交の程、宜しくお願い申
し上げます。

お陰様で例年の如く、
大晦日の徹宵坐禅 午後
十時〜午前二時 引き続き
本堂にて大般若祈祷し、
「檀信徒各家の諸縁吉祥」
を祈願致しました。

曹洞宗の名は、洞山良
价【一〇七〜八六九】と
その弟子曹山本寂【八四
〇〜九〇一】の名前に由
来する。しかし曹山の系
譜は四代で絶えたが、洞
山の弟子の一人、雲居道
膺【?〜九〇二】の法孫
は脈々と現代にまでつづ
いている。この意味で雲
居の法は重要である。
では、教えをヒトツゴ

紹介いたしましょう。

「自分の名前は何か」

北京の近くで生を享け、
少年から出家し、二十八
才で学問仏教から訣別し、
ある僧の勧めで南方の江
西省に住する洞山良介禅
師に身を投じる。その初
対面の時の問答

洞山「闍梨、名は何ぞ」

雲居「道膺」

洞山「向上更に道え」

雲居「向上に道わば即ち

道膺と名づけず」

洞山「われ雲巖に在りし

時の祇対と異なる

こと無きなり。」

闍梨は阿闍梨の略 意

訳は軌範士・正行という、

大衆の規範、手本となる

正行の人、禅宗では「僧」

と呼ぶ。

「あなたの名は何?」「ハ

イ、どうしようと申します。」

「それは生まれてから付
けられた名前だろう。私
が聞いているのは、あな
たがまだ母の胎内にいた
時(向上||真理)の名だ。」
「その時(向上)の名前
は無いです。」

すると洞山は「その名
前のない生命と同じ体で
今日も生きている、名前
の付いた自分の経歴や学
歴等も大事だが、名前の
付かない自分(真理)は、
もっと大事だ。」

「俺は白人だ、大臣だ、
善人だ・病人だ・貧乏人
だ・悪人だ・男だ…。」自
分で自分に案外縛られて
いる事が身近にある。勝
手に線引きしておいて、
これ以外は私の仕事では
ないとバリアーを張って

現場の融通が利かなくな
っている。

棘の道を歩き、損得
を越え、国境も越え、自
他の垣根をも越えて活動
している「私のいのち」

美味しいものを口にし、
「有難い・美味しくくて、
ああ幸せ」この時、自身

のままて安楽な微笑み仏
となつて、子孫の安
らぎを寺社にて願う、こ
の時自身が安らかな先祖
になつていく。

名詞に振り回されない無
限定を「什麼・何」と云
う。あなたは「何処から
きて・何が不満で・何を
求め・何をしに・何処へ
行き・何に成ろうとして
いるの?あなたの何とは
何ですか?」読者の方

も何故?を力まずに自問
してみてください。

雲居は初対面の問答
で名前に振り回されない、
対立のない無限定(俺は
これだけのことを今まで
してきた人間だ、こんな
に尽くしてやってやったの
に、あいつの対応は何だ、
などという想いが無い柔
軟心)の真理は尊いと体

現したので、洞山は感に
堪えず「わしが先師、雲
巖大和尚に参禅した時の
問答と同じであったぞ。」
雲居を全面的に肯定する。
諸縁を放捨し万事を
休息する―坐禅(心の平
和と行動の安定)
自分に無いもの・知
識・常識を他者から学ぶ
ことを「学知」と道元禅
師はいう。卒業証書の無
い仏道は、生老病死を通
じての「生知」「学知」「無
師知」という「知」がある。
もともと自分にきちんと
具わっているものをじぶ
んで知る。「仏道を習う
というは自己を習うなり」
です。

信を育てる。「知・情・意
産んでいただいた、
いのちの尊さを悟ること。
今の自分の心身を健全に
保つてくれる、呼吸・食
物・新陳代謝・空気・水・
電気・時間等のいのちに
支えられていることを知
る「生知」心臓のある生
物だけがいのちでは無い。
すると、有難い・可
哀想・尊い・綺麗・美味
しい等々、命に「情緒」

が溢れますと、めしを
「飯・かずと言わず」「お
かず」・粥と言わず「御
粥さん」・箸を「お箸」・喰
うを「いただく」と言い
もするし、扱いたくなる。
「あのときは大変だ
ったけど、あれを続けて
良かった。」生きる意欲
が出ると、「生きてきて
良かった。」微笑みの意
思が日常活発になる「意
欲」他人の評価に振り
回されない自信となる。

世壽八十歳、お釈迦様
「この世は美しい、いの
ちは甘美である。」と最
期に云われました。

世壽五十四歳、道元禅師
「また見んとおもひし時
の秋だにも 今宵の月に
寝られやはする」

この世の別れに、京
都の月を一睡もせず眺
められました。

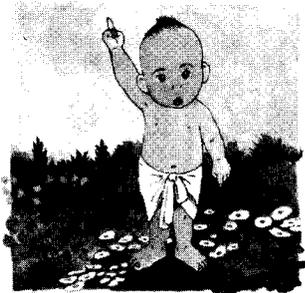
「散る桜 残る桜も 散
る桜」 良寛

今年もいのちを見る目を
大切に、皆様の御多幸を
祈っております。

ゆかり

お釈迦さまと絆を結ぶ縁の目

お誕生の日



4月8日

こうたん え
降誕会 (花まつり)

お釈迦さまは、今からおよそ2500年前の4月8日に、インドの北、現在のネパールにあるルンビニーの花園でお生まれになりました。お釈迦さまの誕生日のお祝いを、「花まつり」というのはこのためです。

この日は、美しい花が咲き乱れる花園に見立てた花御堂に誕生仏をおまつりし、甘茶をかけてお祝いします。甘茶をかけるのは、うぶ湯の代わりに、天が甘い雨を降らせて誕生をお祝したという言い伝えによります。

この「花まつり」とは、何と優しく希望に満ちた響きを持った言葉でしょう。長く厳しい寒さの続いた冬が去って、暖かい太陽の日差しに草木も美しい花を咲かせ、人も自然も生き生きと活動する春の訪れ。お釈迦さまがこの世にお生まれになったことが、私たちの生活に一筋の希望をもたらす明るい春の日ざしのように感じます。私たちをお救いくださる尊いお方、お釈迦さまの誕生日をみんなで祝いいたしましょう。

お別れの日



2月15日

ねはん え
涅槃会 (花まつり)

お釈迦さまは2月15日にお亡くなりになりました。お釈迦さまの場合は亡くなったことを「涅槃に入る」といい、この日を涅槃会というのです。

お釈迦さまは、35歳で仏陀となられてから80歳で涅槃に入るまでの間、多くの地域で人々に教えを説いてまわられました。その最後の地となったのは、クシナガラというところでした。

いよいよ自分の最期が近いことをお察しになられたお釈迦さまは、沙羅双樹の木のもとに体を横たえ、「私の亡きあとは、自らを大切に、これまで私が説いた教えをよりどころとして、いつも心を正しく保ち生活するように」と、最後の説法をされ涅槃に入りました。命あるものは、いつかは滅するという真理をお示しになったのです。

涅槃会には、お釈迦さまの最期の様子を描いた涅槃図をかけて、そのご遺徳を偲びます。涅槃図には、弟子たちだけではなく多くの動物や昆虫までもが集まってきてお釈迦さまの死を嘆き悲しんだ姿が伝えられています。

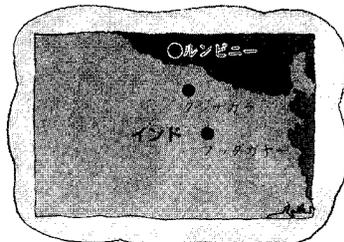
● お釈迦さまってどんな人? ●

お釈迦さまは、今からおよそ2500年前にインドの北にあった、カピラ国という小さな国の、釈迦族の王子としてお生まれになりました。何不自由のない生活を送られたお釈迦さまでしたが、「人はどうして生まれ、年老いていくのだろうか。いつ病気になるかわからないし、いつかは死を迎える。人生には、どうして悲しいことやつらいことが多いのだろうか。何の心配もなく、皆が幸せに暮らすことができないのだろうか」と、人生に対して悩み苦しむ、深く考え込む青年時代を過ごされました。

この問題を解くためにお釈迦さまは29歳のときに城を出てそれまでの王子としての生活を捨て去り、修行者となりました。6年間に及ぶ修行を経て、35歳のときについに長年の疑問が解け、悟りを開いた人「仏陀」となられたのです。

それからのお釈迦さまは、教えを伝える旅に出ました。これが仏教の始まりです。以後、80歳でお亡くなりになるまでの45年間、人々に教えを説き続けました。その教えは絶えることなく今日まで連綿と受け継がれています。

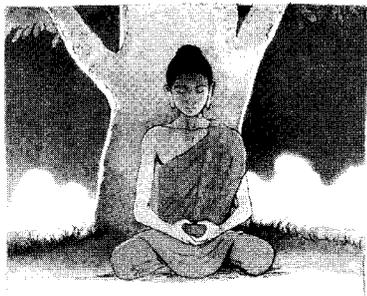
お釈迦さまの足跡



- お誕生の地
ルンビニー
- お悟りの地
ブッダガヤー
- お別れの地
クシナガラ



お悟りの日



12月8日

じょうどう え
成道会

悟りを開き、仏陀になることを、成道といいます。12月8日は、お釈迦さまが悟りを開かれ仏教が誕生した尊い日で、成道会といえます。

お釈迦さまは日々、「人は、せっかく生まれてきても、病気にもなるし、年もとる。いつ死ぬかもわからない。皆が何の心配もなく、幸せに暮らすことはできないのだろうか」と思いを巡らせておられました。この答えを求めて29歳のときに出家し、6年間苦行を続けましたが、どうしても心の安らぎが得られませんでした。そこで、苦行を離れる決意をし、疲れた体を癒してから、大きな菩提樹の木のもとで坐禅瞑想をされたのです。そして、明けの明星をみて、ついに悟りを開かれたのです。

お釈迦さまは、私たちの苦しみの原因を正しく見極め、その苦しみを取り除くために、毎日をどのように過ごせば良いのかを、説き示されました。それは、頭で考えるだけでなく、生活態度そのものをきちんと整え、実際に行動に移すことが大切である、ということなのです。

坐 禅
子 供 か ら 老 人 ま だ の 様 子



校 外 授 業



い す 坐 禅 も 可



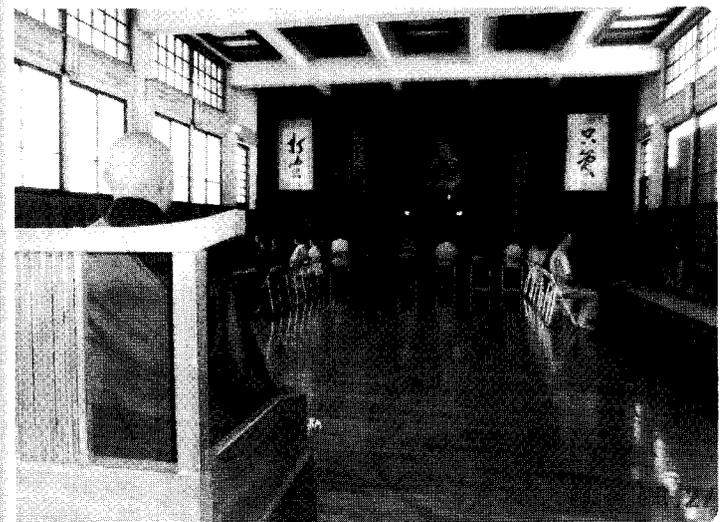
修 学 旅 行



老 人 会 法 話



養 護 学 校



心 静 か に。

「ジャータカのえほん」

—おしゃかさまが生まれるまえのおはなし—



おしゃかさまは、シヤカ族の王子さまとして、お生まれになりました。なんでもなんでも生まれかわって、そのたびにたいへんりっぱな、おこないをされました。

そのけっか、シヤカ族の王子さまに、お生まれになったのだといわれています。

では、おしゃかさまは、どんなよいおこないをされたのでしょうか。



「なまけものの子じか」

子じか

文・豊原 大成
絵・小西 恒光
自照社出版

「ジャータカのえほん①」より再掲

なまけものの子じか

むかしむかし、おしゃかさまは かしこい おすのしかとしてお生まれになり、森の中に すんでいました。

ある日のことです。

おねえさんの しかが 子じかを つれてきて いました。

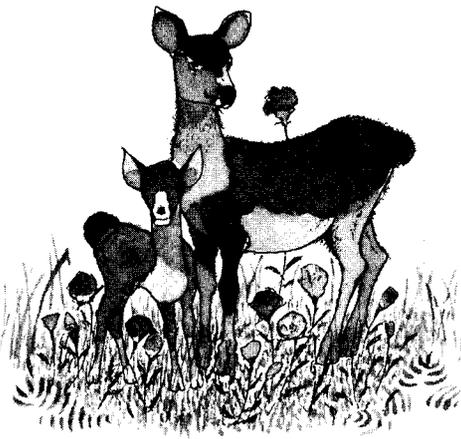
「これは わたしの 子どもです。しかが、しつて いなければならぬ。いろいろな ことを、この子に いろいろ おしえて やつてくたさい。」

おすのしかは 「よろこんで」と いって ひきうけ、「あすから まいにち べんきようしようね」と、子じかと やくそくしました。

ところが、子じかは あくる日のやくそくの じかに おすのしかのところに きませんでした。

つぎの日も、そのつぎの日も、また そのつぎの日も 子じかは べんきように いかずに、まいにち あそびまわって いました。

そして 八日め、子じかは 森の中に しかけてあった わなにかかって しまったのです。



りようしは、なまけものの子じかを ころして、その肉を たべてしまいました。

子じかの おかあさんは 「どうして あの子に たいせつなことをおしえて くれなかったのですか」と、なきながら おすのしかに いました。

おすのしかは かなしそうに ことえました。

「あの子は、べんきように こな かったのですよ。」

(丁二五)

道元禅師和歌

安名尊

七の仏の ふる言は

まなぶに六つの 道を越えけり

古来この歌は、いろいろに筆写され伝えられた。七の仏は、奈良の仏・とをの仏・などの仏などに、ふる言は、古言葉・古言・古詞などに、越えけりに、超けり・越えたり・ヨエタリなど、さまざまに書かれている。道元禅師全集には、左のような註がある。

天正本「永平高祖建誓記」ハ「此歌不審、安名尊 なるの仏の 宣言 学ぶに六つの道に、越えたり、若し如此なるべきか」ト註シ、欄外二別ニ「我たのむ 七のやしろの ゆうだすき かけても六の 道にかえすな」(自賛アリ)ノ一百ヲ掲グ。

七のやしろのゆうだすき と詠まれたところが、奈良となり、七の仏となったようでもある。七のやしろ(七社)は、山王七社のことで、比叡山に伝教が、大和三室の大三轮神を勧請し、山王守護神として祀った(日吉神社のこと)もの。この歌は疑問点多く、今後の研究にまちたい。

「安名尊」尊しの語に、嗟・噫・あやなどの感嘆詞を接続したもの。催馬楽に、「あなふと、今日のたふとさや、古へもはれ、古へもかくやありけむ」とある。

「七の仏」過去七仏をいうが、その第七仏としてこの世に現われた釈尊のこと。

「ふる言」古き言葉、古き教え。上の句、七の仏のをうけ、陳ぶる、宣ぶる意。(歌意)

ほんとうに尊いことである。お釈迦さまをはじめ、おおくの仏たちの教えを学び、つくづく思うことは、宿業とも云える六趣の世界を超えて、菩薩の世界や、仏の世界へも導いて下さることである。仏の教えに会うことができ、これを学び、美しい淨い心を発することが、これにかなう道といえる。

俳句

浄土なる三松禅寺今日の月
美しき琴の調べや月の客
露の世に恩師恋ふるや月今宵
復興の鐘研する良夜かな
まほろばの雲洲平田稲の花

平成二十五年九月吉日

高橋慈雲

